

## 芸術学専攻の教育と再編

岡崎昭夫

人間総合科学研究科助教授

### 芸術学専攻の設立

平成13(2001)年4月に発足した人間総合科学研究科に芸術学専攻が設置された。この専攻の前身は、我が国の総合大学で数少ない芸術学・デザイン学分野を持つ博士課程として昭和51(1976)年4月に開設され、平成17(2005)年3月に閉鎖された芸術学研究科であった。

この研究科の発足当初は、学生定員7名で担当教員7名という小規模な組織であったが、昭和59(1984)年4月に芸術教育学分野、同60(1985)年4月には美術論分野、さらに同62(1987)年4月には構成学分野が導入されて、当初の2分野から5分野に教育内容が拡大された。

昭和58(1984)年には最初の課程修了の博士を送り出し、研究科の30年近くに及ぶ歴史の中で、90名以上の博士号の学位取得者を社会に送り出してきた。彼らの多くは、国内の大学の研究機関に所属して、未だ学

位の取得が一般的ではない美術・デザインの研究領域において活躍しているし、特に中国・台湾・韓国の留学生の学位取得者は、帰国して高等教育機関に就職し、自国の美術・デザイン界をリードしている。

こうした旧芸術学研究科の遺産を受け継いだ現行の芸術学専攻は、従来の従来の枠組みを超えた広域的な人間総合科学研究科に属することになり、その発足にあたって、旧来の分野の教育体制を旧研究科発足当時の分野(芸術学分野とデザイン学分野)に再編し、理論系だけでなく制作系の博士号の学位取得を可能にするような教員を構成員(27名)に含め、さらに、学生定員を将来的には10名に増員することを計画した(本年度に実現)。

新たな芸術学専攻は、「造形芸術に関する幅広い学識と高度の研究能力をもつ専門的研究者、ならびに卓越した知識・技術的能力を具えた高度専門職業人を養成するこ

と」(平成17年度版『芸術専門学群・大学院案内』、以下芸術学専攻の教育に関する記述は同案内からの抜粋による)を目的として、文系から理系までを含み、人文・社会・自然を横断するきわめて広域的な教育内容を提供している。

## 芸術学分野

本専攻を構成する2分野の一つである芸術学分野は芸術の創造、評価、制度、歴史等について研究する基礎的な学問分野であり、特に造形芸術(美術)に関して、純粹理論から実験制作に至る多角的なアプローチによって、古今東西の人間による文化活動の所産として生成されてきた芸術作品の「美」の解明と創造に取り組むことがこの分野の課題となっている。

この分野の主な研究領域としては、理論的な分析によって美の問題に迫る「美学・芸術学」、歴史的視点から美術作品を考察する「美術史」、技法論的な解析に立脚しつつ、従来の枠組みを拡張する新しい表現にも挑む「制作研究」、この制作研究を系統化・理論化する「美術論」、そして芸術の社会的普及にとって不可欠の教育活動やその歴史について探求する「芸術教育論」などがある。

「美学・芸術学」や「美術史」の領域では、専門性の高い理論的な研究を積み重ねて幅広い見識をもち、自立して研究活動を行う

ことができる研究者の養成を目標にして、芸術学・日本美術史・東洋美術史、西洋美術史からなる授業内容を通して専門的な研究課題を院生が深く追求できるようにしている。

「制作研究」の領域には、「洋画」、「日本画」、「彫塑」、「書」の4つがある。「洋画」では、絵画表現の実践と理論に関して学術的に検証する態度と資質を備えた画家や研究者を育成し、我が国の文化・芸術・教育の発展に寄与する優れた人材を輩出することを目標とし、院生が洋画表現等の授業を通して高次の技能と描画理論に基づいた制作実験に取り組み、自らの表現様式の探求を促している。

「日本画」では、学部段階よりもさらに高度な制作と理論研究により、広範な知識と卓越した専門性を備え、将来の日本画の発展に貢献する人材を養成することを目標にして、日本画表現材料や日本画表現技法の授業を通して、日本画について実践的、歴史的、理論的に分析し、充実した制作が行えるように設定されている。

「彫塑」では、大学よりもさらに高度な制作と理論研究により、広範な知識と卓越した専門性を兼ね備えて、我が国の彫塑芸術に寄与する人材を養成することを目標として、彫塑表現技法や彫塑造形技法等の授業を通して、彫塑に関する歴史・理論・実践

が探求されるとともに、質の高い制作が行えるようになっている。

「書」では、書に関する学術的研究や書の制作において、高度な能力を備えた専門家を養成することを目標にして、書学書法史や書表現技法論等の授業を通して、書に関するあらゆる方面の特定課題を研究することができる。

「美術論」や「芸術教育論」の領域では、美術理論や芸術教育などの専門的知識を基礎として、芸術の創造や鑑賞に係わる根本問題について深く考察し、理論化する美術論や美術教育の研究者の養成を目標にして、学校教育だけでなく美術館やアート・ジャーナリズムなどの芸術支援での研究も新たな課題としている。美術論や美術教育内容論、美術教育方法史等の授業を通して、院生が自らもつ問題意識に方向性を与え、独創性豊かな仮説の実証を奨励し、美術館や芸術教育の現場を支援しうる人材の養成を目指している。

## デザイン学分野

本専攻を構成するもう一つの分野はデザイン分野であり、視覚、情報、空間、環境、設計、保存といった観点からより高度なデザイン教育を行うために、基礎造形から建築までの多様な研究領域の授業科目が開設されている。

それらの科目とは、造形の原理を探求する「構成学」「構成表現論」、現代のメディアを駆使した作品を考察する「総合造形論」、視覚・情報デザインをメディア特性と人間の感受性の関係から探求する「視覚伝達設計論」「視覚伝達表現論」などである。

また、製品デザインを形態と機能から探求する「製品形態設計論」、人間の居住・生存に関する問題を考察する「環境デザイン論」、複合的・総合的な人間の居住環境を建築・ランドスケープ・都市のスケールで探求する「建築計画論」「建築設計論」「比較建築論」「居住環境計画論」「ランドスケープデザイン論」「都市デザイン原論」の科目があり、これらの問題を時間軸において現代的視点から探求する「現代建築論」や歴史的に探求する「建築史学」がある。

この分野には、デザイン開発による新産業創出、環境保全、福祉デザイン、空間論、文化遺産とその保全など、隣接関連領域との連帯・学際性を強化した研究領域も組み込まれている。

## 教育と研究指導

旧芸術学研究科では理論系を中心に教育内容の編成がされていたが、制作系の学生にも博士号の取得を希望する者が着実に増加している状況を受けて、現行の芸術学専攻では主に制作系の授業科目を導入するこ

とで、その教育内容は大幅に拡充した。

また、旧芸術学研究科では科目の履修を指定していなかった結果、院生は自らの専門分野に関連する科目の履修に偏る傾向があった。この問題点を解決するために、現行の芸術学専攻で院生は最低複数の教員の授業科目を履修するようなカリキュラムを編成し、さらに専攻共通科目として3年次から履修する「芸術学特別演習」と「デザイン学特別演習」を設定した。

これらの科目は、複数教員による院生への研究指導の成果を、年度末に各分野の全教員や院生に対して口頭で発表するもので、これにより専攻の各分野における教育体制が、研究を目的とした種々の学会のように開放的な性格をもち、教員や院生の相互の情報が公開され、自由で活発な議論を交換できる機会を提供できるようになった。

人間総合科学研究科は複合領域における複数の21世紀COEプログラムを推進する全国的にも数少ない研究科であり、それらの推進に心身を反映する芸術と体育が参画していることは複合領域の特色をきわだたせている。芸術学専攻の多数の教員も「こころを解明する感性科学の推進」における「感性表現研究グループ」に属して、教員や院生がこのプログラムで毎月開催されるワークショップや特別のセミナー等へ参加することにより、人間総合科学というもの

の学際性が理解できるようになった。この研究科が大きな家なら、このプログラムはリビングルームみたいなものかもしれない。

## DCとMCの再編統合

芸術学専攻は、本年度で設立5年目を迎え、来年3月には最初の学位取得者を社会に送り出そうとしている。従来のような理論系の学位取得者とともに、いよいよ制作系の博士号の取得者の誕生が期待され、学位論文審査委員会の構成も改善の方向に向かっている。

本学の大学院博士課程は、前期修士課程2年に後期博士課程3年を積み上げる我が国の一般的な大学院の方式とは異なり、入学当初から博士課程ではじまる5年一貫制を取ってきた。しかし、人間総合科学研究科においては、国立大学法人化に伴い、独立修士課程を博士課程に包摂することを計画している。

この基本方針にそって、芸術学専攻では、芸術研究科と統合して、2年の博士課程前期(1専攻)と3年の博士課程後期(2専攻)に再編することにして、その再編統合案を平成19(2007)年度概算要求として提出することを予定している。そうなれば博士課程前期2年の教育内容は大幅に拡大することになるであろう。

(おかざき あきお/美術教育)